

## 2月公開例会「親のあり方に関する講演会」



講師の森下一氏は、森下神経内科を開業する傍ら、1986年に不登校児のためのフリースクール『京口スコラ』を開設し、多くの子供とその親を見守って来ました。その後、子供達の本当の自立の為に高校卒業資格が必要とわかり、不登校児のための認可高校設立にも力を入れています。2003年には鎌倉青年会議所と出会い、子ども達が夢を抱き生き生きと生きてゆく力を育むための育成プロジェクト『鎌倉てらこや』も実践されています。

### 『鎌倉てらこや』

子ども達を精神的に自立させ、自ら考え自ら行動を起こせる大人に育てる事が目的。子ども、若者、大人の3世代が集い家庭、学校、地域をつなぎ遊びを通して学び、気づきを得て共に成長し合える場。「親が育ち子が育つそんな地域を作ろう」を合言葉に人材、文化力、自然環境を駆使し様々な教育プログラムの企画実践をしている。

### 『京口スコラ』

引きこもり、不登校の子ども達が自室を出てもっと開かれた空間で多くの人達と出会い交流し、様々な体験を積める場所として開設したフリースクール。敢えて子ども達の好きにさせて何も強制しない、のびのびと自分を表現出来る場である。大人は子ども達が本当に困った時にだけ手を貸してあげる事だけ、そんな環境を作る事だけで子ども達がいきいきしてくる。その中から子ども達は自ら野球やサッカー、バンド活動等10以上のサークルを自主的に作って出合いや交流を行なった。

森下氏が挙げる問題点として、家族間と地域間の関係が希薄になった事をあげられました。特に日本がバブル期を迎えた辺りから、家族と地域の関係が希薄になり、さらに子供が集団で生きる世界も少なくなってしまった。同時に、大人になる成長過程で周りに見本になる大人がいなくなった事を憂っていました。学びとは尊敬できる大人の真似をする事から入っていく。良き人と出合いが子どもを大人にする。その出会いの場すら無くなって行く。こんな環境で育った子供達は、楽な方へ楽な方へ、快樂の方向へ向かう人間に育ってしまう。そういった意味で現代人は、人としての育ちが危ぶまれている。

## 森下氏が考える子ども達に必要な事とは？

子どもが小さい頃から人の役に立つ事を学ばせるように地域の大人達が使命感を持つ。子どもは安心して暮らせる場所を求め、慈愛の心を受けて感謝の心を学んだ時、積極的に活動するようになる。親が子ども達に伝える事は、今まで生きて来て一番大事だという事を、一生懸命教えて行かなければならないとした。そして現代に一番欠けている部分である「複眼の教育」に力を入れているとの事。子ども達は親だけで育てる事は出来ない。地域の人達との関係の中で初めて子供達の倫理観が育つと、森下氏は語る。



森下先生の講演を聴き、我々が考えている以上に教育の問題点の根は深い所にある事を再認識させられました。我々が子どもの頃に親の姿や言動を糧に成長したように、我々自体が今、子ども達の見本となっているという事や、どのように子ども達と真剣に向き合い、大人、親として子育ての本質や親のあり方についての気づきを得る事ができました。そして同時に寺子屋事業の意義と必要性を学び、寺子屋つばさ事業が地域の活性化に結びつく事も知る事ができました。

## 6月公開例会 親のあり方に関する講演会～人には聞けない 子ども問題撃退マニュアル～

開会に先立ち、一般市民向けにこの日の講演会以降で開催が決まっている寺子屋つばさ事業の告知と、燕三条の地で開催される地区フォーラムの告知を、スクリーンに映像を映しながら行なった。



講師には、(有)塾教育学院・メンタルケア部門代表の長田百合子氏を迎える。氏は31年にわたり愛知県内各所に280軒以上の学習塾を開設し、子供たちに数・国・理・社・英の五科目を指導する一方で、不登校、引きこもり、非行など子供の問題を抱えた家庭・家族の更正を目的としたメンタルケアを行い、2000件以上の家族問題を解決してきた。

### 薬物について

人間として当たり前の生き方をしていた昔は、現代のような子供の問題など無かった。今は、親を意識改革させ、親が変わらなければ子供も変わらない時代になってしまった。

親は子供が引きこもりや不登校となると心療内科などの医療機関をたやすく受診し、医師は業務として子どもの症状に病名を付け、これまたたやすく向精神薬を処方する。この種の薬は麻薬と変わらない非常に強い依存性を持つ薬であり、手を出すことは簡単で一旦服用するとなかなか止めれず、量が多くなることはあっても少なくなることはないという。心の病には薬物に頼らない対処が絶対に必要と訴えた。脳の出来上がった大人ならまだしも、これからやっと成長する子ども達の脳には必要の無いものだとした。

### 序列について

家庭内での序列、父親・母親・子供の順番を守る事は、家族という最小の組織から抜け出て学校や社会の大きい組織の一員として行動していくにはこれを基本に教えなければならない必要な要素であるとした。現代はこの序列が正しく機能していないので社会が無秩序化している。家庭の中にも序列がある。父親を立てることで一家の規律が守られるようになる。特に子ども達の前では父親の存在や決定は絶対であるようにすると色々な場面で対処がしやすいと語る。

我が子が大事なものは皆同じだが、大事にしすぎることも害になる事がある。過保護や過干渉は子ども自身の成長に繋がらない。あくまでも子ども自身が自ら主体的に行動し経験し学ぶことで始めて大人になるのだとした。



子供の教育をするためには親がまずしっかりと行動で示してあげ、そこから良い・悪いの判断を教えていき、駄目な事は叱り正しい事を教え、良い事は褒め子供達に自信を与えて育てる。将来、子どもを一人前の社会人として世に送り出す事が親の使命だという事を伝えてもらいました。また、親亡き後の子ども達の幸せは我々は作れません。だからこそ、大人・親が子どもの成長段階の時々でできることを丁寧に子ども達に教え、学ばせ、躡ることに我が子の将来が懸かっていると実感できました。

## JCI誕生の日 永井一郎氏による「バカモン ～波平 日本を叱る～」

講演会の開会前に一般参加者向けに、今年度行われた青少年育成事業、寺子屋つばさ事業について映像を見ながらの説明が行われた。てらこや事業の目的から、事業を行なった結果まで説明がありました。内容が子育てに関わるということで、講演会への参加者は食い入るように映像を見て説明を聞いている姿が印象的でした。



### 何故、波平は叱れるのか

終戦まもなくから始まったサザエさん。波平は52歳位。逆算すると明治生まれになり、明治の美学をもった人間と言う事になる。何故波平は叱れるのか?「それは明治の躰・明治の美徳から成り立っているからである。」と言う。今の親が叱れないのかは規範を持っていないから。怒る事は感情でぶつかれば良いが、叱る事は基準が必要である。それが明確で無いから叱る事が出来ない。更に今の親は分別(ぶんべつ)が無い。子どもに他人に迷惑を掛けるなど教えるが、その前に何が他人にとって迷惑かを教えていない。そこから始めなくてはならない。

### 教育と言うものとは

よく個性を伸ばそうと言うが、本来個性は抑えても抑えてもどうしても出て来るのが個性である。伸ばすものではなく勝手に出てくるものなのだ。先生が教室で騒がしい生徒を叱ると保護者からのびのび育てているから叱るなどと言われる事があると言う。子供は放任のまま良い大人になるとしたら大間違い。その結果現代に不条理な犯罪が増えてしまったのだ。悪いのは誰でもなく全て親が悪い。自由と平等の本質も考えずに字面だけが一人歩きした結果である。政治もゆとり教育になったりならなかったりと教育がはっきりしていない。教育とは立派な社会人を作る事それだけであり、そうするだけで子供達は自身で進むべき道を決めていけるようになる。

### 人間であるが故にすり替わってしまった幸せ

地球上に生きる生き物は全て幸せになる為に行動している。究極の幸せとは安全に良い子孫を残すことである。人間にとっては良い子孫を残す条件としてお金や権力も要素に含まれるが、それがいつしか条件の一部ではなく、お金や権力を求める事自体が幸せだとすり替わってしまった。お金が出来たために人間が壊れ、その人間が今、地球までも壊していくだろう。



日本人がサザエさんを見続けている間は、日本人の根底にある日本人らしさは存在し続けます。この講演会を通して永井一郎氏が仰られたキーワードは、日本の美徳・規範・分別・ルール、そして幸せの意味。その言葉とその意味を忘れずに子供達に伝えていく事が文化の伝承に重要だと学びました。

## ま と め

3つの講演会を通して大人・親として子育ての本質や親のすべき事、心得を多角的に学びました。親亡き後の我が子の幸せを作れませんので大人・親が今すべき事を子ども達に丁寧に躰ることに将来が懸かっています。しかし、我が子が大事でも大事にし過ぎる事も害になる事があると知る事も出来ました。親以外の大人が複眼の教育として地域が一体となり、子ども達を見守りながら育成していく事が必要だと、寺子屋事業の意義を理解した場面でした。何よりも、子ども達を一人前に育てるためには我々が大人・親としての手本でなければなりません。それを先人から学ぶ必要がありました。日本の父親像として不変的な存在である「磯野波平」からは、大人・親としての立ち振る舞い方が学べました。サザエさんは日本人の道德観を表した日本のソウル番組です。この世界観には明治時代の美学が受け継がれています。平成の世に我々が見ても時代性に違和感を感じないのは、我々の根底に日本人らしさがあるからです。この意味を我が子へ、そして地域の子ども達へ文化として伝えて頂きたい。